

天明九年

布袋庵
新年

明月
付之

王乃春押也

年未

諸候名羈旅一途
る道のを失ふ事無く
少くもままで

行

驛路

終

常

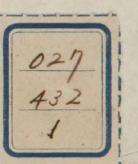
春梅

清漬

ひ麻くとく小梅の

花

東瑞



常 もうまい

新屋

春
梅

泥漬を麻子と小や梅の花

佐原
惟山

青梅やいうすらもまた雪く消東瑞

紅梅の田木で鶴乃著衣始

簾魚

禁物にて薰ひあきるの梅

厚浮

生よみの木にて後もや梅の影

画梅

青毛大根へ生よみて先の花

岐麦

の葉や冰や下りて水汎夜笛

袖垣下るも鷺やウサギのむ

諸鷹

梅もや染地のやまとに猫の波

昌九

梅も朱と袖川引くや梅の花

愛史

伊勢一朝もやうやくみ乃木

木戈

春の日は斜陽と宇宙のを
林を塗るそと見難造
莊丹 亞

寫

丁巳暮春小不果游也。能草
冬花

當年海國圖書局
子友

馬江
萬世也

宜興同弟也生於崇山峻谷
素兄

仙風

卷之三

くは其事に於て、
其の後、

字俱比予永平丁亥古文

此處之江漢之風氣也

秀喜の亨やかくみ楠の歌

修業の代士吉の谷子と
久女

ノくはなむか草木枝葉鶯聲

風

岸よりのにつき色の伸
文角
す但比多の水西にてひるかぬ
石耳

二

此より一宿りぬ取方の本
孫風
うえ身の事やがくめ柿の館
秀石
や修善の代主の谷口を
久安
鷺や一音拂ひて二度こゝ
まわ安
学やうすすすとす、鄙び坐が一庵
篁雨

柳

於の下に之の生根條く系柳
椿川田合

石の面、戈度梅々全かきれ人、汝誰
翁不入に生根く全ひよ小 東松

御明う居眠襟へ柳の角 山芝

うる縫縫、根、門を抱る、林立
地とも成る、ハズ柳のれ 天吉

座来

我名を余まく洩すを主一筆

聞塚

一ノタリ二ツぶ合ふまくすの筆

東石

や山明ノ所を意向うまくの筆

上尾

成字

稚子形ノ約の駒かにせ手外

頑茂

よ一鳴や臘毛毛夜の生すも時

相君

書多音声もすらまき詠草木

木奴

哉一鳴の通者の宣寫

大官

尾滿

印写やうハ碑ノ之日の月

龜色

谷川高瀬ノ波やまの魚

指扇

楊羽

遠山や霞はれくまの毫

江府

三一鳴やれしもく乃女連

楊桂

至る代やほりうき一毫

古

文通

江府

抱出房
門琴

後う子そ商ひ初アササシ

多少庵
秋忙

酒ぬらそ紙や多ひて雪の菜

遠山や震はぬくさの巻

五雪

三鳴やれもく乃女連

楊桂

至多氏すほくうま一毫色

七

文通

江府

抱出字門琵

折り子そ高ひ初イ箭

多庵

松翁庵

秋忙

酒やちゑや、多見く雪み菜

松翁庵

霜後

蓮の月の月に雪の花

宋珠

三脚かくすの葉の番下

花若

鶯や何よとく枝川里

恩巴州

三脚かくすの葉の番下

雪江

鶯里朝一すく枝川里

尾生水の女

林咲くよすくうり臘月

謂實庵

烹丸

專女知愛

第 11511 號

書圖

大明書院



323
1156

三五三

